視点

ソリューションのモダナイズを超えるデジタルアクセラセーションの実現

デジタルアクセラレーションのスピードに合わせて進化するライセンスモデル

エグゼクティブサマリー

デジタルアクセラレーションを推進するにあたり、企業はより高速で快適なアプリケーションエクスペリエンスを提供する必要に迫られています。その過程でわかったのは、この変革は非常に流動的で複雑であるということです。アプリケーションはデータセンターからハイブリッドクラウド、マルチクラウド、エッジコンピュートまで、あらゆるところに存在するからです。

そのため、カスタマーエクスペリエンスやパフォーマンス、コスト最適化など、最大限のビジネス成果を挙げる必要のあるあらゆる領域において、アプリケーションとそれらを保護するために必要なセキュリティが欠かせません。

長期的な取り組みの進行に伴って、企業の戦略、目標、要件も進化します。デジタルアクセラレーションを保護するために必要なソリューションも変化します。したがって、ソリューションのテクノロジー面だけではなく、ソリューションの取得やライセンスの方法にも目を向ける必要があります。また同時に、コストの管理と最適化が多くの最高責任者や経営陣にとって大きな懸念事項であることも認識する必要があります。

47% を超える企業がプラットフォームとサービスに柔軟性を求めています。[1]

固定ソリューションへの閉じ込めや一定期間の制約が生じる従来型のライセンスモデルは、すべての企業やケースに最適であるとは言えなくなってきました。そこで注目すべきは、ユーザーベースのライセンスアプローチです。このアプローチによって大いに必要とされている柔軟性が得られ、必要なソリューションをどこにでも希望する期間だけ展開できます。

投資の価値を失うことなく、必要のなくなったソリューションの使用を停止する機能が求められている、という点は非常に重要です。企業はこのようにして、コストを最適化し、必要なスピードでデジタルアクセラレーションの目標を達成できます。

デジタルアクセラレーションの流動性に対応するライセンスモデル

ビジネスを成功させるための鍵の一つは、顧客の需要や企業のニーズにできるだけすばやく応えることです。迅速な対応の可否は、取得、プロビジョニング、展開をいかにすばやく行えるかにかかっています。また、多くの企業にとってはコストも大きな懸念です。

したがって、デジタルアクセラレーションの取り組みを保護するソリューションの調達方法を見直す必要があります。検討すべきは、必要なソリューションやサービスをいつでも展開できる柔軟性と敏捷性の両方を備え、支出を最適化して最善の ROI を実現できるようなライセンスアプローチです。

課題とトレンド

なぜライセンスモデルが重要なのかを理解するために、企業がデジタルアクセラレーションの取り組みにおいて直面する業務上および運用上の主な課題について考えてみましょう。

展開サイズの正確な判定の難しさ

ソリューションに関して何が本当に必要なのかを事前に把握することは困難です。サイズ判定は容易ではなく、企業はニーズを過大評価し、過剰なプロビジョニングを行ってしまいがちです。過小評価やプロビジョニング不足はさらに問題です。ニーズを過大評価していた場合、必要以上に料金を支払うことになり、投資と運用の両面でプロジェクトの総コストに影響が及びます。一方、過小評価していた場合は、需要を満たすことができません。クラウドへの移行など、デジタルアクセラレーションの取り組みを始める前の段階で膠着状態に陥り、最適なサイズを判定できないことも珍しくありません。

需要と使用量の変動

クラウドを運用している場合、インフラストラクチャでの需要が変動し、拡張・縮小が必要になることがあります。従来のライセンスモデルでは、これにダイナミックに対応することはできません。スケールアップ / スケールアウトのために必要な追加ソリューションを取得したり、スケールダウン / スケールインすべき状況で未使用のリソースのコストを無駄に負担したりせざるを得ません。

予測不能なコスト

特に従量制（PAYG）でクラウドを利用している場合、意図せず予算を超過しがちです。クラウドインフラストラクチャでの時間単位や月ごとの支払い額は急速に膨れ上がります。多くの場合、企業は現時点での利用状況を把握できず、問題が表面化するまで使いすぎに気づきません。

調達が遅れた場合の悪影響

ライセンス、サービス、ソリューションの調達を待っている間に遅れが生じる事態は、デジタルアクセラレーションそのものの目的に反します。Infrastructure-as-Code を活用している、またはクラウドやアプリケーション展開の需要が増加しているなどの非常にダイナミックな環境で遅れが生じると、顧客満足度の低下や収益面での損失、評判の低下を招きかねません。したがって、デジタルアクセラレーションの取り組みに合わせてライセンスモデルも早期に移行する必要があります。

要件の変化

デジタルアクセラレーションは長い時間のかかる取り組みです。長期旅行と同様に、必要なものが途中で変わることもあります。期間と数量を固定した従来のライセンスモデルでは、当初購入したソリューションから抜け出すことができず、契約した期間とサービスレベルに縛られます。

従量課金型のセキュリティライセンスの必要性

クラウド、ハイブリッドクラウド、またはハイブリッドメッシュファイアウォール（HMF）環境でデジタルアクセラレーションを推進している企業は、すべてとまではいかなくても上記の課題に直面します。デジタルアクセラレーションの取り組みに合わせて、展開環境とその環境内で稼働するアプリケーションおよびデータを保護するには、これらの課題の解決がより一層重要になります。

従来のライセンスモデルでは、一定期間の固定構成およびサービスに対するライセンスをあらかじめ購入する必要があり、追加のソリューションやサービスが必要になるたびに調達する必要がありました。無駄な購入サイクルによって手続きが複雑化し、間接費用が発生するほか、展開までに時間がかかります。また、購入時にサブスクリプションの期間、サイズ、サービスが固定されることから、ダイナミックに変化する環境やアプリケーションに最適であるとは言えません。

そこで検討すべきは、従量課金型のライセンスアプローチです。従量課金制はシンプルで、必要な分だけ使用した量に基づいて料金が発生します。さらに、リアルタイムでダイナミックにソリューションを導入し、拡張・縮小できる点も、従量課金型のセキュリティソリューションの特長です。デジタルアクセラレーションの取り組みを保護しながら、その過程での投資やコストを最適化でき、

どのような要件にも随時対応できる柔軟性と敏捷性が得られます。また、ビジネスや要件の進化・変化に合わせ、コスト効果の高い方法で環境を開発し、適応させることができることも重要な点です。

結論

企業はデジタルアクセラレーションの取り組みを続けながら、その実現と保護のためのソリューションを迅速に展開し、展開方法や利用方法もモダナイズする必要があります。特に、絶え間ない変化と拡張・縮小を必要とする、非常にダイナミックな環境においては、そのような対処が特に必要であると言えます。従量課金型ソリューションの導入によって、どのようなクラウドまたはハイブリッドクラウドでも、あらゆるアプリケーションジャーニーを追求し、必要に応じて進化する自由と柔軟性が得られます。今日の投資が、未来の取り組みの基礎となるのです。

「ソフトウェアおよびサービスがCBM（従量課金型モデル）に占める割合は、2021 年には41% でしたが、2026 年には56% に増加するでしょう」[2]

[1] "Cloud Computing Study 2022," Foundry, April 6, 2022
[2] Adrian O' Connell, "Forecast Analysis: Consumption-Based Models Portfolio Opportunity, Worldwide," Gartner, May 1, 2023.

フォーティネットジャパン合同会社

〒106-0032
東京都港区六本木7-7-7 Tri-Seven Roppongi 9 階
www.fortinet.com/jp/contact

お問い合わせ

Copyright© 2023 Fortinet, Inc. All rights reserved. この文書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製、または電子媒体に複写することを禁じます。この文書に記載されている仕様は、予告なしに変更されることがあります。この文書に含まれている情報の正確性および信頼性には万全を期しておりますが、Fortinet, Inc. は、いかなる利用についても一切の責任を負わないものとします。Fortinet®、FortiGate®、FortiCare®、およびFortiGuard® はFortinet, Inc. の登録商標です。その他記載されているフォーティネット製品はフォーティネットの商標です。その他の製品または社名は各社の商標です。